

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (201)

「水を呑む」のは？

夕食後です。タモツ君のおばあさんがおじいさんと話しています。

「俳句って、韻文いんぶんだから、むずかしいんですね。」

「そう。昔、朝日新聞に連載していた大岡信の「折々のうた」に石川桂郎の「遠蛙酒の器けいろう とほかはづ うつはの水を呑むの」が紹介されていてね、学生諸君と読んだことがある。学生諸君の多くは、俳句だと気づかずに、蛙がさかすき盃の水を呑むという情景にしていたよ。」

「おもしろい！ 季語の「遠蛙」で切れるって、気づかなかったのね。」

「そう。それに、日本語では、わかりきった主語は言わないってことを意識しない。」

「遠くで蛙の鳴く声がある。医者から酒を禁じられている私は、酒の器である盃に満たした水を呑むことだ——と言うんでしょう。」

「そう。盃には酒を満たすはずだけど、病気でそうはできないわびしさなんだね。」



酒で満たしたいが、医者から禁じられているので水を呑んでいるんだ。



【編集部注】「遠蛙」の句は、「遠蛙が酒の器の水を呑む。」という文ではありません。「遠蛙。酒の器の水を呑む。」という二つの文でできている文章です。石田波郷の「霜の墓抱き起されしとき見たり」も、「霜の墓。抱き起されしとき見たり。」という二つの文でできている文章です。波郷は「白々と霜をおいた墓、病み疲れた身を家人に抱き起されたとき、窓外にその墓を見た驚き、感動がこの句を生んだのである」と書いています。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (202)

自分を突き離す

夕食後です。タモツ君のおばあさんがおじいさんと話しています。

「石川桂郎けいろうの「遠蛙」の句の主語のことで思い出したのですけれど、先日、『素十俳句すじゅう 365日』という本を見ていたら、「藺帽子あの主あるじの曰いはく万事ばんじれう了」というのがあったの。」

「へええ、初めて聞く句だ。畳表いぐさにする藺草を編みあげて作った夏の帽子をかぶっている人が言うことには「万事が終わった」と。——ってどういうの？」

「そう。「五月十二日発病」と前書きがあるんですって。高野素十は、この脳梗塞の発作がもとで、後に亡くなるの。だから、「藺帽子の主」っていうのは、自分自身なのよ。」

「驚いた。そんなふうに関自分自身の死を客観視することができるんだ。」

「同じときに、「夏くわしゆきたの人空手来りて空手去る」という句も作っているの。なんにも持たずに生まれてきてなんにも持たずに死んでいく。自分自身を「夏の人」って、言っているの。」



自分自身の死を
客観視することができるんだね。



【編集部注】名句鑑賞読本4『素十俳句365日』は、1991年、梅里書房刊です。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (203)

「痰のつまりし仏」

夕食後です。タモツ君のおじいさんがおばあさんと話しています。

「文学研究の専門家ではないから素人の感想にすぎないけれど、俳句って、自分自身を突き放して見つめることがあるのじゃないのかな。正岡子規の「糸瓜咲て痰のつまりし仏かな」だって、自分自身のことを「仏」と言ってるんだから。」

「あら、そうね。絶筆の三句の最初の句よね。いつも「痰一斗糸瓜の水も間にあはず」や「をととひのへちまの水も取らざりき」と並べて読むものだから、気がつかなかったわ。」
「きみに素十の句を教えられて、自分自身を「藺帽子の主」とか「夏の人」とかと他人事のように言うのは、子規の「仏」と同じかなって、ふっと、思ったんだ。」

「その「仏」で思い出したわ。一茶には「ぼつくりと死が上手な仏哉」というのがありましたよね。亡くなる前の年の作ですけど、この「仏」も自分のことじゃないかしら。」

絶筆の三句は、正岡子規が作った最後の句です。



【編集部注】高野素十の句は、ことばのコラム 200 で話題になっていた「藺帽子の主の曰く万事了」
「夏の人空手来りて空手去る」です。なお、一茶の句は、旧仮名遣いで書かれています。「ぼつくり」は「ぼっくり」です。また、子規の句にふりがなのように漢字があててあるのは、原文のまま旧仮名遣いのひらがなで引用しているので意味が読み取りにくいのではないかと配慮しての注記です。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (204)

一茶と子規と

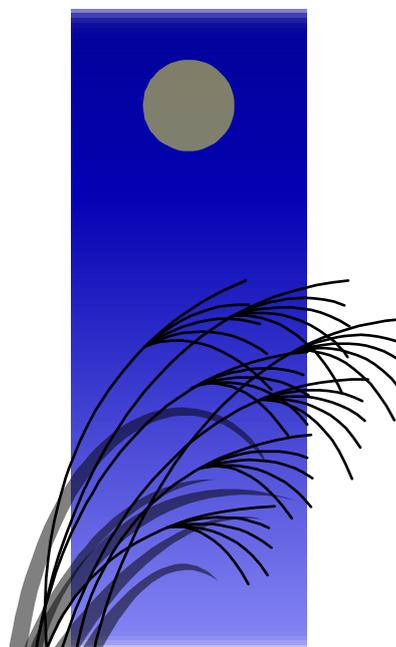
夕食後です。タモツ君のおじいさんがおばあさんと話しています。

「へええ、一茶に「ぽつくりと死が上手な仏哉」なんて句があったんだ。正岡子規はこの句を知っていて、「痰のつまりし仏かな」と言ったのかもしれないね。」

「中学校の先生として国語を教えていたころ、一茶の「名月や仏のやうに膝をくみ」というのは、月のあまりの美しさに祈りに似た敬虔な気持ちになって姿勢を正すのだと思ったのですけれど、この年齢になってこの句を読むと、この「仏」も死に近い自分自身の姿なのかもしれないなあって……。」

「なるほど。一茶のころのお棺は、文字どおり桶でできた棺桶で、座棺が多かったようだから、お棺に納めるときには、「仏のやうに膝をくみ」だったのかもしれないね。」

「名月の夜の死。「その如月の望月のころ」よりも一茶らしい願いかしらね。」



【編集部注】タモツ君のおばあさんの言っている「その如月の……」は、西行法師の「願はくは花の下にて春死なんその如月の望月のころ——願うことは、桜の花の下で、春の季節に死にたいということだ。その春の季節の陰暦二月の満月のころに」です。一茶は、中秋の名月のときに仏のように膝を組んで座棺に収まりたいと願ったのこののでしょうか。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (205)

「ヒトのふり見て」って？

週一度の祖父母を交えての夕食のとき、小4のタモツ君が言いました。

「おばあちゃん、「ヒトのふり見てわがふり直せ」って、どういうこと？」

「ほかの人のすることを見て、自分のことを直しなさいということ。」

「ヒトって、ほかの人のことなの？」

「そう。ひとごとというのも、自分とは関係のない、ほかの人のことということなの。漢字では「他人事」って書くの。」

「最近は、タニンゴトって言う人が多いですよ。」と、タモツ君のお父さん。

「そう。ヒトゴトということばを知らないで、文字で見て、そのままタニンゴトということばだと思ってしまうのだろうね。」と、タモツ君のおじいさん。

「ヒトって、人間でしょ。」と、タモツ君の妹の小1のエミちゃん。

他人事 $\left\{ \begin{array}{l} \text{ヒトゴト◎} \\ \text{タニンゴト??} \end{array} \right.$

「ヒト」って、
人間でしょ。



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (206)

「ヒト」って？

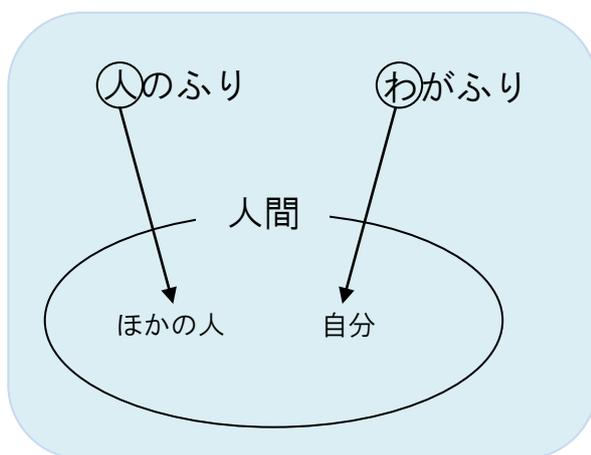
週一度の祖父母を交えての夕食のとき、タモツ君たちの話を聞いていた妹の小1のエミちゃんが「ヒトって、人間でしょ。」言いました。

「そう。エミもそう思ったんだ。ぼくもヒトって、人間のことだと思ってた。」

「そうねえ、むずかしいわね。「イヌとヒト」とか「サルが進化してヒトになった」とかというときのヒトは、人間だけど、「ヒトのふり見てわがふり直せ」のときのヒトは、自分以外の人、ほかの人ということなのよね。」と、おばあさん。

「人のふり」に対しての「わがふり」だろ、「人の」と「わが」とが対^{つい}になっている。こういうときは、ヒトが「人間」でなく、「ほかの人」ということになる。」と、おじいさん。

「エミ、わかった？ 「人の」の「人」も、「わが」の「わ」も人間だから、その人間の中で、「人」は「ほかの人」、「わ」は「自分」ということになるんだって。」と、タモツ君。



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (207)

「人」と「おのれ」

週一度の祖父母を交えての夕食のときです。

「タモっちゃん、見事！ 「人」と「わ」でなく、「人」と「おのれ」になることもあるのよ。「人の頭はえの蠅よりもおのれの頭の蠅を追え」っていうの。」と、おばあさん。

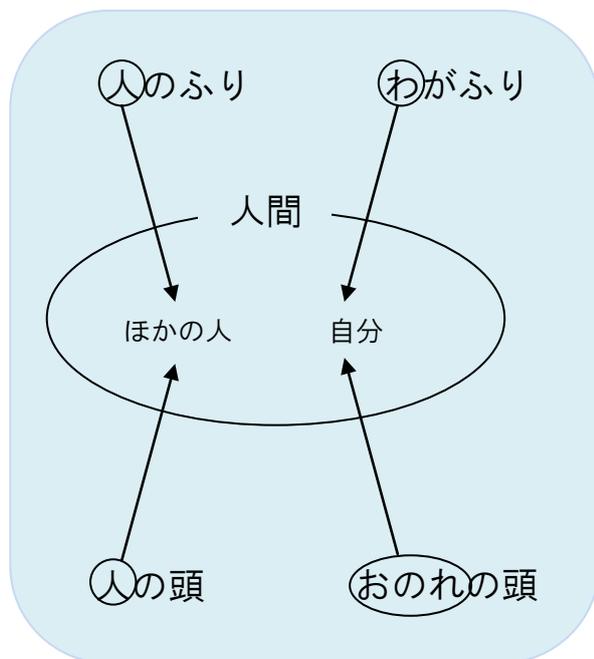
「ほかの人の世話をやくよりも自分のことを先にしなさい、ということ。」と、お母さん。

「わかった。「人のふり」と「わがふり」、「人の頭」と「おのれの頭」。「人」は、「自分」じゃなくて、「ほかの人」なんだね。」

「タモツ君、「ほかの人」が「人」だと、「自分」は何かな。」と、おじいさん。

「簡単！ 「わ」と「おのれ」でしょ。」

「タモツ、違うんだよ。おじいちゃんがおっしゃるのは、「ほかの人」を「人」扱いにすると、自分は何になるのか、ということなんだ。」と、お父さん。



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (208)

「人」と「者」

週一度の祖父母を交えての夕食のときです。「人のふり見てわがふり直せ」や「人の頭の蠅はえよりもおのれの頭の蠅を追え」というときの「人」は「ほかの人」のことだとわかったところで、タモツ君は、おじいさんから「自分」は何かという質問を受けました。お父さんが「ほかの人」を「人」扱いにすると、自分は何になるかだというヒントをくれました。

「さすがのタモっちゃんも、困ったわね。タモっちゃんは「溺れるおぼなんとかは藁わらをもつかむ」って、聞いたことがない？」と、おばあさん。

「ほんとうは丸太とか大きな板とかがほしいけど、そんな頼りになるものがないときには、溺れた人は、何の助けにもならない藁でもつかむっていうのよ。」と、お母さん。

「わかった！ 溺れる者は藁をもつかむでしょ。」

「お兄ちゃん、「かわいそうな人」が「もの」なんだね。」と、エミちゃん。



「ほかの人」を「人」扱いにすると、「自分」は何になるか、ということだよ。



「自分」は、「わ」と「おのれ」でしょ？

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (209)

「もの」扱い

週一度の祖父母を交えての夕食のときです。タモツ君が「^{おぼ}溺れる者は^{わら}藁をもつかむ」と言
うと、妹の小1のエミちゃんが「かわいそうな人」が「もの」なんだね、と言います。

「エミちゃん、すごい！ そうよね、溺れていて藁しかつかめないんですもの、かわいそう
な人よね。」と、おばあさん。

「うーん、「一銭を笑う者は一銭に泣く」というのもある。今なら、一円かな。一円ぽっち
だからって一円を大切にしない者は、その一円がないために、泣かなければならないような
ことになるということだよ。百円のものは99円では買えないからね。」と、おじいさん。

「わかった！ お金を大切にしない人が「もの」なんだ。」と、エミちゃん。

「そう。溺れていて藁しかつかめない「かわいそうな人」、一銭を笑う「お金を大切にしない
人」、そういう人が「もの」扱いにされるのね。」と、おばあさん。

「かわいそうな人」
「お金を大切にしない人」

「もの」扱い



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (210)

「人」扱いと「物」扱い

週一度の祖父母を交えての夕食のときです。おじいさんが言いました。

「タモツ君の質問から、すいぶんむずかしい話になってしまったね。「人のふり見てわがふり直せ」とか「人の頭の蠅^{はえ}よりもおのれの頭の蠅を追え」とかいうときの「人」は、「自分」ではない「ほかの人」のことだ。「溺^{おぼ}れる者は藁^{わら}をもつかむ」とか「一銭を笑う者は一銭に泣く」とかいうときの「者」は、「人」ではないんだね。おばあさんが言ったように、「人」を「もの」扱いにしている。漢字で書くと「者」だけど、「物」なんだ。考え深い人なら溺れるような危険を冒さないだろうし、身を守るための備えをするだろう。また、自分の力で苦労してお金を得ている人であれば、一銭だって大切に使うだろう。考えもなく苦労もしない人は「人」ではないんだね。「物」と同じなんだね。そうだ、自己紹介で名刺を出すとき、「私はこういう者です。」とへりくだって、自分のことを「物」扱いにするんだよ。」

私はこういう者です。

へりくだって、自分のことを「物」扱いするんだよ。



【自己紹介】



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (211)

ヒツボクケンシ

小4の教室です。タモツ君の隣の席のサユリさんが話しかけました。

「タモっちゃん、ヒツボクケンシって、知ってる？」

「ケンシって、剣を使う人？」

「違う。毛筆書写に関係あるの。」

「お習字に？」

「そう。お習字に必要なもの。」

「じゃ、筆とすみと……」

「そ！ すずりと紙。こう書くの。筆墨硯紙。」

「そうなんだ。都道府県みたいなことばだね。」

「うん。しゅんかしゅうとう とうざいなんぼく春夏秋冬や東西南北も同じ。」

ヒツボクケンシは、
お習字に必要なもの。



【編集部注】国語の学習の中に書写が位置づけられています。1・2年は鉛筆による硬筆書写、3・4年から毛筆書写が取り入れられます。教室では墨汁を使うことが多く、硯で墨を磨ることはあまりありません。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (212)

トウザイナンボク

小4の教室です。タモツ君が隣の席のサユリさんと話しています。

「春夏秋冬は筆墨硯紙と同じだけど、東西南北は違うんじゃない？」

「違う？」

「うん。筆墨硯紙は、お習字で使う筆とすみとすずりと紙でしょ。春夏秋冬は、季節の春と夏と秋と冬。ばらばらの四つのことばが集っているだけだけど、東西南北は、反対の方角の東西と南北でしょ。」

「そっか。□・□・□・□の型と□⇄□／□⇄□の型なんだ。」

「サユリちゃん、すごい！ 東西南北は、前後左右と同じ型なんだね。」

「そうだ、山川草木というのもあったよ。」

「うん。古今東西というのもあった。」

□・□・□・□の型

筆墨硯紙

春夏秋冬

都道府県

冠婚葬祭

・
・

□⇄□／□⇄□の型

東西南北

前後左右

山川草木

古今東西

・
・

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (213)

□・□・□・□型

小4のタモツ君は、学校の帰りにおばあさんのところに寄りました。

「今日、サユリちゃんに、ヒツボクケンシってことば教わったよ。」

「ずいぶんむずかしい四字熟語を教わったのね。」

「うん。4年生になると、毛筆書写があるでしょ、だから。」

「そうなの。5年生になると、社会科の歴史で、江戸時代の士農工商も出てくるわね。武士と農民と工人と商人。工人というのは、大工さんとか左官屋さんとか建具屋さんとか仕立屋さんとか染物屋さんとか鍛冶屋さんとか……、技術で暮しを立てている職人さんよ。」

「そんなものもあるの。ぼくは、都道府県しか思いつかなかった。」

「たくさんありますよ。規矩準繩きくじゆんじよう・起承転結しやうろうびやうし・生老病死むげんぼうやう・鳥獸虫魚・偏旁冠脚・夢幻泡影・綾羅錦繡りやうら きんしゆう・麟鳳龜竜りんぼう きりゆう……。タモっちゃんが知ってるのは、漢字の偏旁冠脚かな。」



【編集部注】「工人」は、「しょうにん」の「にん」と同じで、「こうにん」と言われてきましたが、最近では「こうじん」とも言われます。中国では、労働者を「工人」と言います。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (214)

キクジュンジョウ

タモツ君は、学校帰りに寄ったおばあさんのところでおばあさんと話しています。

「偏旁冠脚も知ってるけど、起承転結も国語の時間に習ったよ。起こして受けて転じて結ぶ。漢詩の絶句や四コマ漫画がそうになっているんだって。」

「そう。お釈迦様のおっしゃったという人間の四つの苦しみの生老病死、人以外の動物の鳥獣虫魚、はかないものの夢幻泡影、美しい布の綾羅錦繡、めでたいことが起こるときに現れるという霊獣の麟鳳亀竜……。麟は麒麟、鳳は鳳凰よ。」

「最初にキクなんとかってというのがあったでしょ。」

「ああ、規矩準縄ね。規はコンパス、矩はものさし、準は水平かどうかを調べる器具の水準器、縄はまっすぐか曲がっているかを調べる墨縄。」

「墨縄って、糸に墨をつけてあるのでしょ、大工さんが使っているのを見たよ。」



規矩準縄は、物事の規準となるもの。規則。手本。法則のことです。

【編集部注】『広辞苑 第六版』で「すみなわ」を引くと、〈墨糸(すみいと)に同じ。〉とあり、「すみいと」を引くと、〈「墨壺」1参照。〉とあります。「すみつぼ」に〈①大工や石工などが直線を引くのに用いる道具。一方に墨肉を入れ、他方に糸(墨糸)を巻きつけた車をつけ、糸は墨池の中を通し、端に仮子(かりこ)という小錐(こきり)をつける。墨糸を加工材にまっすぐに張って垂直に軽く弾くと、黒線が材面に印される。〉とあります。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (215)

下げ墨

タモツ君は、学校の帰りに寄ったおばあさんのところでおばあさんと話しています。

「そう！ タモっちゃんは、墨繩すみなわを見たことがあるんだ。」

「大工さんが大きな材木の端に針のついたボッチを刺して、黒い糸を伸ばして引っ張って、反対の端のところでは抑えつけて、糸をつまんでぱちんと離して線を書いていた。」

「そう。墨繩の糸で直線を引くところを見ることのできたのね。錐きりを柱の高いところにとめて墨繩をぶら下げると、柱がまっすぐに立っているかどうか調べられるの。」

「針のついたボッチは小さな錐なんだ。墨繩がおもり 錘おもり になって糸がまっすぐになるんだね。」

「そう！ そうやって垂直かどうかを調べることを「下げ墨さげすみ」って言うの。おもしろいのは、大工さんが上から下へ吊り下げた墨繩おの糸を見下ろして柱の傾きを調べるから、人を見下すくだ ことも「さげすむ」っていうんだって。「さげすみ」を動詞にしたのね。」



下げ墨…柱などの傾きを見るために、大工が墨糸を垂直にたらし

見定めること。(『広辞苑 第六版』より)

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (216)

さげすむ

タモツ君は、学校の帰りに寄ったおばあさんのところでおばあさんと話しています。

「おばあちゃん、「さげすむ」って、どういうこと？」

「ああ、そうか。タモっちゃんは、人を見下すことなんて、ないのかな。」

「ミクダスって、軽蔑するってこと？」

「そう。尊敬するのが「見上げる」、軽蔑するのが「見下す」。」

「ありがとう。わかったよ。大工さんが柱の傾きを見るために、「下げ墨」を上から下へと見下すから、その「さげすみ」を「さげすまない、さげすみます、さげすむ」と言うように使って、人を見下すという「さげすむ」ということばができたってということなんだね。」

「お見事！ そのとおり。」

「筆墨硯紙とか規矩準縄とか、今日は、たくさん教わっちゃった。ありがとう。」



おばあちゃん、ありがとう。
感謝感激！

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (217)

フウカセツゲツ

小4の教室です。タモツ君が隣の席のサユリさんと話しています。

「サユリちゃんに筆墨硯紙って四字熟語を教わったって、おばあちゃんに話したら、規矩準縄とか生老病死とか、たくさん教えてくれたよ。」

「私も春夏秋冬や東西南北のことをお母さんに話したら、フウカセツゲツっていうのを教えてくれた。」

「なに、それ。」

「夏は風、春は花、冬は雪、秋は月なんだって。四つの季節を代表する、見て楽しめるものなんだって。」

「夏の風、春の花、冬の雪、秋の月で、ふう か せつげつ風花雪月。春夏秋冬の順番じゃないんだね。」

「うん。夏の風のないせつげつ か「雪月花」という三字のことばもあるんだって。」



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (218)

四苦

小4の教室です。タモツ君が隣の席のサユリさんと話しています。

「風花雪月は夏春夏秋冬の順番、雪月花は冬秋春の順番。おもしろいね。」

「タモっちゃんもおばあさんに教わったって言ったけど、私もお母さんに生老病死っていうのを教わったよ。四苦っていうんだって。」

「お釈迦しゃか様が言ったんだってね。」

「うん。四苦だけでなく、八苦というものもあるんだって。四苦八苦っていうんだって。」

「そうなの。生まれること、年をとること、病気になること、死ぬことのほかにどんな苦があるの？」

「そうよね。ほら、四方八方っていうのは、東西南北のほかに北東北西南東南西があるからって、お母さんに聞いたけど、四苦のほかの四苦は、お母さんも知らないって。」

四苦だけでなく、
八苦というものもあるんだって。



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (219)

八苦

小4のタモツ君は、学校の帰りにおばあさんのところに寄りました。

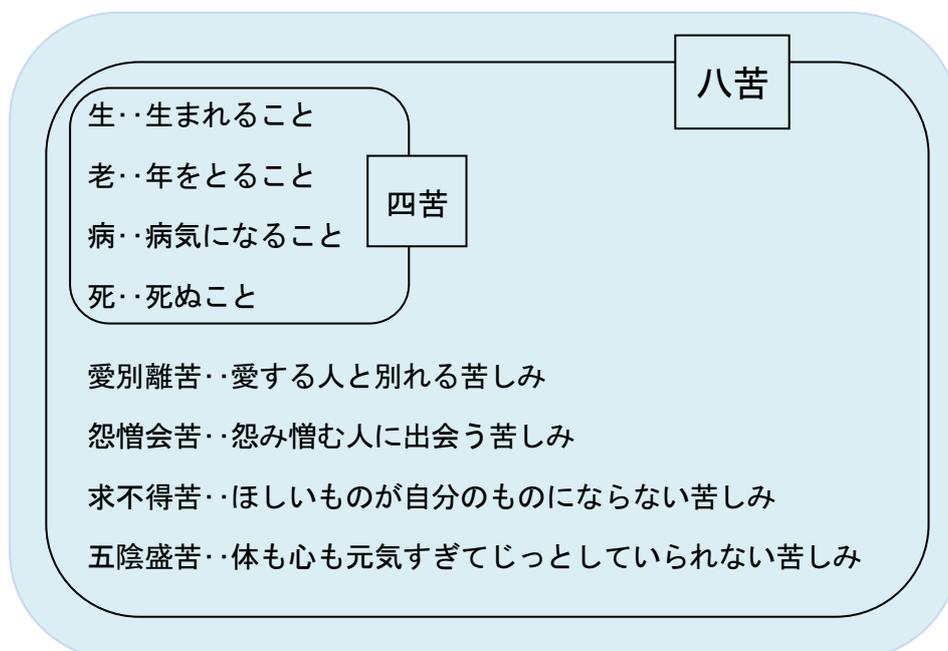
「おばあちゃん、四苦八苦の八苦って、知ってる？ サユリちゃんがお母さんに聞いたけど、知らないって言われたんだって。」

「あらあら、むずかしい話になったのね。この間話した生老病死の四苦あいつりく おんぞうに、愛別離苦・怨憎会苦えく ぐふとくく ごおんじょうく・求不得苦・五陰盛苦えく ぐふとくくの四つを加えて、八苦。」

「わあ、なんだかもものすごい苦だね。」

「そう。愛する人と別れる苦しみ、怨うらみ憎む人に出会う苦しみ、ほしいものが自分のものにならない苦しみ、体も心も元気すぎてじっとしてられない苦しみ。」

「なあんだ。最後のがわからないけど、ほかの三つはぼくにもわかる。好きな人と別れるのもつらいけど、恨んだり憎んだりしなければならない人と出会うのもつらいもんね。」



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (220)

怨憎会苦

タモツ君は、学校の帰りに寄ったおばあさんのところでおばあさんと話しています。

「タモっちゃん、すばらしい！ おんぞう え く 怨憎会苦がわかるなんて……。そうなのよね。愛する人と別れる苦みの愛別離苦と同じように、うら 怨んだり憎んだりしなければならなくなる人と出会う苦みの怨憎会苦があるの。」

「ぼくは子どもだから、そんないやな人に出会ったことがないけど、おばあちゃんは、そんな人に出会ったことがある？」

「うら 怨めしいと思ったり憎らしいと思ったりした人には出会ったことがあるけれど、怨んだり憎んだりするようになった人に出会ったことって、なかったわね。」

「そうなの。オンゾーエクは、なかったんだ。」

「そう、人に恵まれて、しあわせだったのね。」



怨んだり憎んだりしなければならなくなる人に、出会ったことある？



なかったわね。
人に恵まれて、
しあわせだった
のね。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (221)

漱石枕流

小4の教室です。タモツ君の隣の席のサユリさんが話しかけました。

「タモっちゃん、ナツメソウセキって知ってる？」

「うん。『坊っちゃん』って小説を書いた人でしょ。」

「そう。お父さんが教えてくれたんだけど、夏目漱石のソウセキってというのは、ソウセキチンリュウという四字熟語からとったんだって。中国のソンソまくらっていう人が「石を枕にし、流れに口すすぐ」と言おうとして、間違っまって、「石に口すすぎ、流れを枕にする」って言っちゃったんだって。山野で石を枕にして寝ることはできるし川なんかの流れる水で口をすすぐこともできるけど、石で口をすすぐことも流れを枕にすることもできないだろうって言われて、いや、石で歯を磨き、流れで耳を洗うのだって言ったんだって。だから、間違いを認めず、こじつけて言い逃れることを漱石枕流しんじょ せんそって言うんだって。」

石で歯を磨き



流れで耳を洗う



間違いを認めず、こじつけて
言い逃れることを
漱石枕流って言うんだって。



【編集部注】「漱石枕流」は、648年に成った中国の晋代の正史『晋書』孫楚しんじょ伝に見える故事成語です。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (222)

流石

小4のタモツ君は、学校の帰りにおばあさんのところに寄りました。

「おばあちゃん、『坊っちゃん』の作者の夏目漱石のソウセキって、漱石チンなんとかって
いう四字熟語からとったんだってね。サユリちゃんに教わったよ。」

「漱石枕流ね、サユリちゃんとは、ずいぶんむずかしい話をしているんだ。」

「うん。サユリちゃんのお父さんが教えてくれたんだって。」

「今はそう書かないけれど、「実力どおり、やはり」という意味の「さすが」ということば
を「流石」って書いたことがあったのよ。「流石サユリちゃんのお父さんだ。」なんて。」

「間違っ^さって言っても、うまく言い逃れたから？」

「さすがタモっちゃん！ そうなのよね。でも、「暖冬とはいっても、十二月になると、さ
すがに寒い。」というように、「そうは言っても、やはり」という意味でも使うの。」

「流石」

意味

- ・実力どおり、やはり
- ・そうは言っても、やはり

漱石枕流を教えてくれる
なんて、流石サユリちゃん
のお父さんだ。



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (223)

沈と枕

タモツ君は、学校の帰りに寄ったおばあさんのところでおばあさんと話しています。

「おばあちゃん、漱石枕流のチンって漢字、沈没のチンと似ているね。」

「あら、タモっちゃんは、まだ沈没なんて漢字、習っていないでしょ。」

「うん。前に新聞にフェリーの沈没って書いてあるのを見て、調べて、覚えた。」

「そう。沈没のチンはサンズイのしずむ、枕流のチンはキヘンのまくら。」

「サンズイとキヘン、ヘンが違うんだね。」

「そう。ツクリはチンという音を表すの。でも、タンという音になることもあるの。」

「タン？」

「そう。ミミヘンがつくと、耽美^{たんび}のタン。深く沈む、ふけるという字になるの。耽美^{たんび}というのは、美しいものに深入りするということ。」

		ヘン		音
ツクリ		キヘン	=	枕流 ^{ちんりゅう}
宥	+	サンズイ	=	沈没 ^{ちんぼつ}
		ミミヘン	=	耽美 ^{たんび}

【編集部注】「沈」も「没」も小学校では習いません。ただし、常用漢字表にはあって、中学校で学びます。なお、耽美^{たんび}・耽溺^{たんてき}の「耽」、虎視眈々^{こしたんたん}の見下ろして欲深そうに見つめる意のメヘンの「耽」、耽溺^{たんてき}の深酒をする意のヒヨミノトリヘンの「耽」は、常用漢字表には収められていません。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (224)

宀

タモツ君は、学校の帰りに寄ったおばあさんのところでおばあさんと話しています。

「おばあちゃん、サンズイがつくと沈没の沈、キヘンがつくと漱石枕流の枕、ミミヘンがつくと耽美の耽たんびになるツクリの字は、チンとかタンとかの音を表すだけなの？」

「ワカンムリにひらがなの「ん」みたいに見える「宀いん」ね。」

「これ、インという字なの。」

「そう。「ん」のように見えるのは、「人」。ワカンムリに見えるのは、農業につかう道具か武器ではないかって……。人が肩にそんな道具を載せている姿を写した字で、道具が重いので下のほうにひっぱられるという意味を表すのではないかって考えられているの。」

「ふーん。枕は、頭を載せると、下のほうにひっぱられるというのかな。」

「そう！ まるで漱石枕流のこじつけみたいね。」



武器か農具のような物を担っている形にかたどる。

『角川大辞源』



人がまくらをして
いる形にかたどる。

『大漢語林』

【編集部注】「宀」について、『角川大辞源』の解字には〈象形。武器か農具のような物を担っている形にかたどる。「イン」の音は、下にひく意(=引ィン)と関係がある。〉とあり、『大漢語林』の解字には〈象形。人がまくらをしている形にかたどる。枕の原字。まくらをして寝ているさまから、沈滞する、おこたる意味を表す。〉とあります。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (225)

儿

夕食時です。タモツ君が言いました。

「お父さん、今日、おばあちゃんに教わったのだけど、沈むという字のツクリの^{いん}宀という字のひらがなの「ん」みたいに見えるところが「人」だって知ってた？」

「いや、知らなかった。光という字のかたかなの「ル」のように見えるところ、^{ひとあし}儿が「人」だとは知っていたけれど……」

「光という字の儿は、「人」なの？」

「そう。人が頭の上に火を掲げている姿なんだって。すてきでしょ。」と、お母さん。

「まわりを明るく照らすんだね。」と、タモツ君の妹の小1のエミちゃん。

「元氣の元、兄弟の兄、充実の充、先生の先、児童の児、免許の免……、「人」が儿になっている字はたくさんあるね。」と、お父さん。



光という字の儿は、「人」なの？



そう。人が頭の上に火を掲げている姿なんだって。すてきでしょ。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (226)

党

夕食時です。タモツ君がおばあさんに教わった「宥」のひらがなの「ん」に見える部分が「人」だということから、お父さんが「光・元・兄・充・先・児・免」など「人」が「儿」になっている字のことを話して、盛り上がっています。タモツ君が言いました。

「まだ習ってないけど、自民党とか民主党とかいう「党」という字の儿も、人？」

「それがよくはわからない。もともとこの字は、尚ショウ＋黒たすくろの「黨」という字だったんだって。その黒が儿になっている字のようなんだ。この儿が人だったのかどうかは、わからない。」

「そうなの。前に、当選ショウたすの当たが尚ショウ＋田たの「當」だったってお母さんに教わってびっくりしたけど、党は、尚ショウ＋黒たすくろの「黨」だったんだ。」

「うん。「當」や「黨」の「尚」は、トウという音を表す音符だけれど、車掌さんの「掌」のときは、ショウという音になるし、講堂の「堂」のときは、ドウという音になるね。」



「人」が儿になっている字はたくさんあるね。元気げんきの元げん、兄弟けいだいの兄けい、充実じゆうじつの充じゆう……。
「党」という字の儿も人かは、よくはわからないんだ。

【編集部注】小学校学習指導要領の学年別漢字配当表によると、「党」は、6年で学ぶことになっています。なお、常用漢字表によると、「尚」は、「掌・賞」ではショウ、「常」ではジョウ、「党」ではトウ、「堂」ではドウの音符として用いられています。なお、「黒」は「黒」の旧字体です。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (227)

掌

夕食時です。「尚」が車掌の「掌」のときはショウ、講堂の「堂」のときはドウになると、
教えてくれたお父さんに、タモツ君が言いました。

「シャショウさんのショウって、どんな字？」

「タモっちゃんはまだ教わってないのよね。「党」という字の「^{ひとあし}儿」のところが「手」になるの。」と、お母さん。

「そう。「たなごころ、てのひら」という字。」と、お父さん。

「じゃ、「車掌」というのは、電車のてのひらなの？」

「いや、「掌」には、「てのひらにのせて何かをする」ということから、「自分のしごととしてする、つかさどる」という意味があるんだ。出発や停止の指示とか行き先の案内とか気分の悪くなった乗客の世話とか車掌さんはいろいろなしごとをするんだよ。」

掌

読み：ショウ

意味：てのひらにのせて何かをする
自分のしごととしてする、つかさどる



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (228)

尚

夕食時です。お父さんが「掌」には、「てのひら」という意味だけでなく、「自分のしごととしてする」という意味のあることを教えてくれました。タモツ君が言いました。

「今、思い出したんだけど、4年生になってすぐ、入賞の「賞」という字を習ったよ。手^{て たす}尚ショウの「掌」^{かいたすショウ}や貝^{て たす}尚ショウの「賞」の字の「尚」は、ショウという音を表すだけなの？」

「いや、講堂の「堂」は、土^{つち たす}尚ショウで、ドウという音になっている。」

「そうじゃないのよね。トウとかドウとかショウとか、尚という漢字は音を表しているけど、漢字だから、意味もあるのじゃないかっていうのよね。」と、お母さん。

「あ、そうか。「尚」は、向^{むかう たす}十八ハチの会意文字なんだね。「向」は窓、「八」は散らばるようすで、北向きの高い窓から炊事の煙が立ちのぼるという意味がわかりやすいけど、高窓のところに神さまのけはいが立ち込めているという意味にとる考え方もあるらしいよ。」

尚

向 — 窓

八 — 散らばるようす

読み：ショウ

意味：北向きの高い窓から炊事の煙が立ちのぼる
高窓のところに神さまのけはいが立ちこめている

【編集部注】「尚」について、『角川大辞源』の「解字」には「会意。意符の八（口を開く。また、分散する意）と、音符の向（部屋の北側に高く出ている小さい横窓）とから成る。」とあり、『新潮日本語漢字辞典』の「解字」には「会意。向十八。向は窓。八は神気を示す。」とあります。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (229)

尚早・高尚・尚古

週一度の祖父母を交えての夕食のあと、タモツ君のお父さんが言いました。

「この間、タモツに訊かれて、党や堂や賞の音符の「尚」の意味を話したのですが、話
きして、どうしてこんな意味なんだろうって……。」

タモツ君のおじいさんが言いました。

「時期尚早というときの「尚早」は、「なお早い。まだ早すぎる」ということだし、高尚な
趣味などというときの「高尚」は、「品位があって高い」ということ。今は、はやらないけ
れど、武をたつとぶ「尚武」とか、古きをたつとぶ「尚古」なんてことばもあった。」

「副詞の「なお」と、高い、たつとぶという意味で使っているのね。」と、おばあさん。

「そうなんですよ。会意文字の向コウ十八で、高窓から炊事の煙が立ちのぼるというのが原義な
のだそうだけど、どうして尚早や高尚や尚武なんて使い方になるのでしょうか。」

「尚」は、副詞の「なお」、高い、
たつとぶという意味で使っている
のね。



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (230)

原義と転義

週一度の祖父母を交えての夕食のあとです。「尚」の意味についてタモツ君のお父さんとタモツ君のおじいさん・おばあさんが話しています。

「原義といっても、その字を作った人がこういう意味だと言ったわけではなく、研究者が用例や古い字形から推定したものなのです。高尚というときの「高い」という意味は、高い窓から炊事の煙が立ちのぼるということに結びつくと考え、高いのは上のほうだから、上、もっと上ということで、副詞の「なお」に結びついて「尚早」という使い方もすると考える。尚武や尚古の「たつとぶ」という意味から考えると、「八」が神気で、光の差し込む窓のところに神気がただよふというのが原義だと見たくなる。」と、おじいさん。

「ショウという音が「蒸」や「上・揚」に通じるという解釈もできるのよね。それで、のぼる、ねがう、たつとぶというつながりにするのね。」と、おばあさん。

高尚

高い窓から炊事の煙が立ちのぼる
⇒意味：品位があつて高い

尚早

高いのは上のほうだから、上、もっと上
⇒意味：なお早い

尚武

「八」が神気で、光の差し込む窓のところに
神気がただよふ
⇒意味：武をたつとぶ

【編集部注】『角川大辞源』には、〈「シャウ」の音は、炊煙が上に出る意（＝蒸ショウ）と関係がある。もと、北向きの高窓から炊煙が立ち上る意。ひいて、「たかい」「ねがう」、借りて、「くわえる」などの意に用いる。〉とあります。学研の『漢字源』には、〈空気抜きの窓から空気が上にたち上って、分散することを示す。上、上にあがるの意を含む。また、上に持ちあげる意から、あがめる、とうとぶ、身分以上の願いなどの意を派生し、また、その上になお、の意を含む副詞となる。[単語家族]上・揚(あがる)と同系。〉とあります。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (231)

字源のこと

週一度の祖父母を交えての夕食のあと、子どもたちが寝静まって、タモツ君のお父さん・お母さんとタモツ君のおじいさん・おばあさんが話しています。

「保夫さんは、音楽の楽の字をどう教わってきましたか。」と、おじいさん。

「木に見えるところが楽器を置く台、その台に白に見える大太鼓と、その横に二つずつの小太鼓が置かれている象形文字で、音楽を表すって……。」と、お父さん。

「あら、私は、楽はもと、楽で、木が楽器掛け、白が爪^{つめ}で、その横は糸。爪で糸をはじく弦楽器だから音楽だって教わったわ。」と、お母さん。

「保夫さんは、古く、許慎^{きょしん}の『説文解字』に説かれている打楽器説で教わったのですね。和子さんは、楽器は楽器でも弦楽器と見る羅振玉^{ら しんぎょく}の説を教わった。楽が音楽を意味する字であるにしても、その楽器を打楽器と見るか弦楽器と見るかで、解釈が分かれる。」

「楽」

木に見えるところが楽器を置く台、その台に白に見える大太鼓と、その横に二つずつの小太鼓が置かれている象形文字で、音楽を表すって。

もとは、楽で、木が楽器掛け、白が爪で、その横は糸。爪で糸をはじく弦楽器だから音楽だって。



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (232)

新しい字源説

週一度の祖父母を交えての夕食のあと、子どもたちが寝静まって、タモツ君のお父さん・お母さんとタモツ君のおじいさん・おばあさんが話しています。

「打楽器にしても弦楽器にしても、楽がもともと音楽を意味する字であるというのは、確かなのですか。」と、お母さん。

「ところが、そうでもないのです。白川静は、『字統』に「象形 木の柄のある手鈴の形。これを振って、その楽音をもって神を楽しませる」と説いているけれど、藤堂明保たちの『漢字源』には、「象形。木の上に繭のかかったさまを描いたもので、山まゆが、繭をつくる櫟レキ(クヌギ)のこと。そのガクの音を借りて、謔ギャク(おかしくしゃべる)・噉ゴウ(のびのびとうそぶく)などの語の仲間にあてたのが音楽の楽。」と説いています。許慎の見ることのできなかつた金石文きんせきぶんが発見されたこともあって、新しい解釈がなされているのですね。」

「楽」が音楽を意味する字であるという他にも、新しい解釈がなされていますよ。



【編集部注】『字統』は1984年初版第一刷、平凡社刊の漢和辞書、『漢字源』は、1978年刊の『学研漢和大字典』を受けた、1988年初版、学習研究社刊の漢和辞書です。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (233)

ヒヨミノトリ

小4のタモツ君が学校から帰るとすぐに、お母さんに言いました。

「お母さん、ただ今。今度来た教生の先生、酒田先生っていうの。その先生、サカタのサカは、坂でなくて、サンズイにヒヨミノトリなんだって。」

「お帰りなさい。教育実習生の先生、お酒のサカに田んぼのタの酒田先生なのね。」

「そう。お母さん、どうしてお酒のサカだって、わかったの。」

「だって、サンズイにヒヨミノトリだって、タモっちゃんが言ったじゃない。」

「西みたいな字がヒヨミノトリって言うって、知ってた？」

「知ってるわよ。トリには三つあるの。普通の鳥、ヒヨミノトリの酉、フルトリの雉。」

「三つもあるの。暦や十二支に使うトリだから、ふつうの鳥と区別してヒヨミノトリって言うのだって、酒田先生が教えてくれたけど、もう一つあるんだ。」

サカタのサカは、坂でなくて、
サンズイにヒヨミノトリなん
だって。



サカタ先生

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (234)

フルトリ

小4のタモツ君が学校から帰るなりお母さんと話しています。教育実習生の酒田先生が酒という漢字がサンズイにヒヨミノトリだと教えてくれたからです。

「普通の鳥と、ヒヨミノトリの酉と、フルトリ？」

「そう。集まるという字の木の上、まだ教わってないけど、5年になると習う混雑のザツ、
中学になると習う英雄のユウ、たった一つの唯一のユイ、距離の^{つくり}りの旁がフルトリ。」

「集まるの木の上は「隹」だけど、どうしてこれがフルトリなの。」

「5年生になると教わる字に新旧のキュウという字があるの。新旧というのは、新古と同じで、あたらしいとふるいってこと。そのふるいの旧という字がもとはクサカン^{ふるとり}ムリに^{うす}隹に臼の「舊」という字で、この字に使われているトリだから、フルトリなの。」

「今は使わないふるいという字にあったトリなんだ。ほんとにフルトリだね。」

普通の「鳥」

ヒヨミノトリの「酉」
暦や十二支に使うトリ

フルトリの「隹」
今は使わないふるいという字に
あったトリ

トリには三つあるの。



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (235)

鳥と佳

週一度の祖父母を交えての夕食のとき、小4のタモツ君が言いました。

「おばあちゃん、今日、お母さんに教わったんだけど、フルトリって、知ってる？」

「知っていますよ。誰つくり スイという字の隣の佳のことですよ。」

「だれという字？」

「あ、そうか。タモっちゃんは、まだ教わっていないわね。ゴンベンにフルトリが誰だれ。」

「お母さんは、集まるという字の木の上がフルトリだって教えてくれたよ。」

「そう。3年のときに勉強した進むという字にもフルトリがいたわね。普通の鳥もフルトリも鳥の絵からできた象形文字だけど、尾の長いのが鳥、尾の短いのが佳なんだって。」

「よくそう言われて、小十佳ショウたすスイの雀すずめと雀十鳥カクたすチョウの鶴つるを例に挙げたりするけど、雉きじと鷄にわとり、隼はやぶさと鷹たかはどうかと学生に質問されて、困ったことがあったよ。」と、おじいさん。

フルトリ

「佳」

集・雑・雄・唯

離・進・誰

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (236)

雁と鴈

週一度の祖父母を交えての夕食のときです。おばあさんがタモツ君に「尾の長いのが鳥、尾の短いのが雀」と言うのを聞いたおじいさんが「雀と鶴はよいが、雉と鶏、隼と鷹はどうかと学生に質問されて困った」と言います。

「どうして困ったの。」と、タモツ君。

「尾の長さだけで比べると、雉が短く鶏が長いとか隼が短く鷹が長いとあって、言いにくいからなのよ。」と、おばあさん。

「ごめん、ごめん。混乱させてしまったかな。漢字の起こりから言うと、鳥は尾が垂れ下がるほど長く、雀はそんなに長くはないのだね。でも、鳥とか雀とかの漢字ができてしまうと、尾の長さをそんなに気にしないで使う。鳩とか鴨とかの尾は垂れ下がるほど長くはないし、ガンという鳥は「雁」とも「鴈」とも書くのだよ。」と、おじいさん。

漢字の起こりから言うと、鳥は尾が垂れ下がるほど長く、雀はそんなに長くはないのだね。



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (237)

雅と鴉と烏

週一度の祖父母を交えての夕食のときです。ガンという鳥は「雁」とも「鴈」とも書くと言ったおじいさんのことばを受けて、おばあさんが言います。

「そう言えば、今は「みやびやか」という意味で使う「優雅」の「雅」は、もとは、鳥のカラスを表す字だったのでしたね。」

「そう。ガアガア鳴くから「牙」と「隹」。「雁」と「鴈」のように、このカラスも「牙」と「鳥」の「鴉」とも書いた。」と、おじいさん。

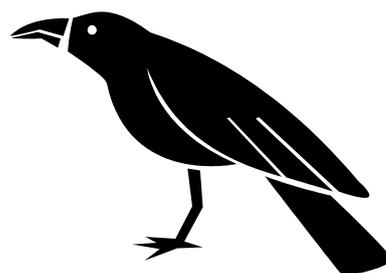
「カラスは「烏」ではないのですか。」と、お父さん。

「そう。全身が黒くて目の部分がよく分からないから、「鳥」という字の第四画目をなくして写した象形文字であるということになっていますね。」と、おじいさん。

「カラスには、象形の「烏」と形声の「雅・鴉」があるのですか。」と、お母さん。

象形の「烏」

形声の「雅・鴉」



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (238)

禽

週一度の祖父母を交えての夕食のときです。タモツ君が言いました。

「おじいちゃん、カラスって、鳴き声の「牙」と「鳥」なの。」

「そう。」

「前にお母さんが鳩という漢字は、鳴き声の「九」と「鳥」だって教えてくれたよ。」

「そのとおり。まだある。ガアガア鳴くガチョウのガは「我」と「鳥」の「鶯」。」

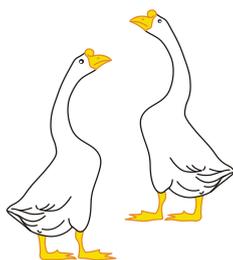
「その「我」をヘンにして「鵞」とも書くのよ。」と、おばあさん。

「ありがとう。今日はたくさん教わったよ。とりには、鳥・西・佳の三つあるとか……」

「タモツ君、とりには、もう一つあるのだよ。常用漢字表には収められていないけれど、網でおさえて逃げられないようにしたとりの「禽^{キン}」。」と、おじいさん。

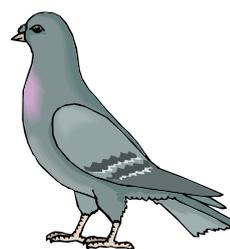
「とりとけもののことを「鳥獣」とも「禽獣」とも言うの。」と、おばあさん。

ガアガア



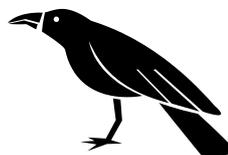
「我」と「鳥」の「鶯」

クックッ



「九」と「鳥」の「鳩」

ガアガア



「牙」と「鳥」の「鴉」

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (239)

酉

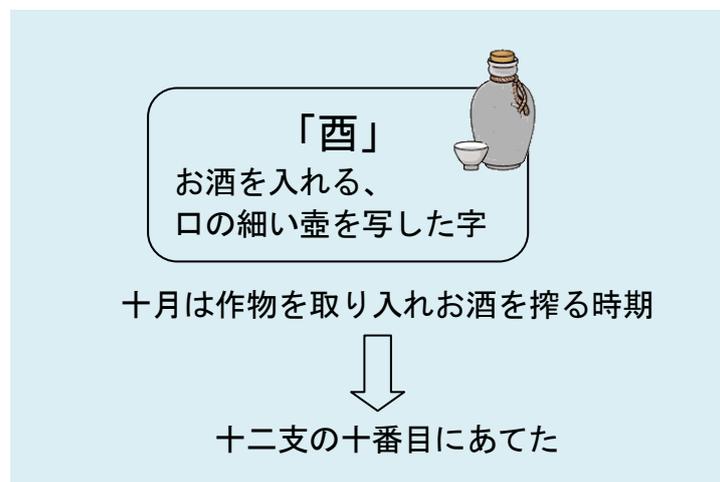
週一度の祖父母を交えての夕食の後です。タモツ君が言いました。

「おじいちゃん、キンジュウのキンとか、ヒヨミノトリのトリとかって、ふつうの鳥のほか
に、いろんなトリという漢字があるのは、どうして？」

「キンは、もともと網でおさえて逃げられないようにした鳥という特別な鳥だけど、お酒を
入れる、口の細い壺つぼを写した酉しほという字を、十月は作物を取り入れお酒を搾る時期だからと
いうので、十二支の十番目にあてたようだよ。その十二支の子シ丑ねずみ寅チュウ卯うし辰ユウ巳とり午未申酉戌亥に動
物をあてるようになった。子には鼠、丑には牛、酉には鶏があてられた。」

「タモっちゃんは、お母さんに子ね丑う寅し卯ら辰う巳た午つ未み申う酉ま戌ひ亥じって十二支を教わったのよね。そ
の酉がもとはお酒の入れ物の壺の象形文字だったのですって。」と、おばあさん。

「びっくり！ 曆に使うヒヨミノトリって、お酒を入れる壺のことだったの。」



【編集部注】『角川大辞源』の「酉」の解字には、「象形。酒を醸すつぼの形にかたどる」とあり、『漢字源 改訂第四版』の「酉」の字義には、「とり。十二支の十番め。▽時刻では現在の午後六時、およびその前後の二時間、方角では西、動物では鶏に当てる。作物をおさめ酒を抽出する十月。のち、十二支の十番めのトリに当てる」とあります。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (240)

酒

週一度の祖父母を交えての夕食の後です。おじいさんが言いました。

「タモツ君、酉は確かに酒壺さかつぼを写した漢字だけれど、お酒を表す漢字だったんだよ。」

「サンズイがついていないのに？」

「そう。入れ物を写して中に入っているものを表したのだね。それがお酒にかかわるものとかお酒のように醱ハッコウ酵させるものとかに使われるようになったので、サンズイをつけてお酒を表すようにしたのだね。」

「タモっちゃんにはむずかしいかな。お酒に酔ようという字の「酔スイ」とか「酪酊メイテイ」とか、醱酵させるものでは、お酢すの「酢酸サクサン」、お醤油ショウユの「醬」、バターやチーズを作る酪農の「酪」なんか、酉が使われているの。そうそう、バターは牛酪、チーズは乾酪と言うの。それから、醱酵させることを「かもす」と言って、「醸す」と書くの。」と、おばあさん。

ヒヨミノトリ

「酉」

酔・酪酊・酢酸

醬・酪・醸す

【編集部注】『大漢語林』の「酒」の解字には、「形声。氵(水)+酉[㊦]。音符の酉ィウ=シウは、さかつぼの象形。甲骨文・金文は、この酒つぼの象形でさけの意味を表したが、のち、水を付した。」とあります。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (241)

醍醐

週一度の祖父母を交えての夕食の後です。酉のついた漢字の話で盛り上がっています。

「醍醐寺の醍醐ダイゴって、やはり 酉ひよみのとりヘン 偏ですね。」と、お父さん。

「そう。醍醐味は、仏教のほうでいう五味ゴミの最高のものですね。」と、おじいさん。

「五味って？」と、タモツ君。

「うん、羊とか牛とかの乳を精製して得られる五つの味。一番目が乳味、二番目が酸味、三番目が生酥味ショウソ、四番目が熟酥味ジュクソ、五番目が醍醐味。」と、おじいさん。

「酥というのは、羊や牛の乳を煮詰めてつくるバターのようなものね。」と、おばあさん。

「酸味なんて、ヨーグルトのような味かしら。」と、お母さん。

「そうですね。羊や牛の乳を煮詰めると上のほうに固まる脂肪分の多いどろどろしたものに菌がついたのでしょうか。最後の醍醐はたぶんチーズね。」と、おばあさん。

醍醐味は、仏教のほうでいう五味の最高のものですね。
一番目が乳味、二番目が酸味、三番目が生酥味、四番目が熟酥味、五番目が醍醐味。



【編集部注】仏教語の「五味」とは別に、「甘・酸・鹹・苦・辛」を「五味」と言います。「あまい・すっぱい・しょからい・にがい・からい」の五つの味です。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (242)

醍醐味

週一度の祖父母を交えての夕食の後です。酉のつく漢字の話で盛り上がっています。

「おじいちゃん、醍醐^{ダイゴ}味って、チーズの味？」と、タモツ君。

「うん。羊や牛の乳を精製して造られるものの最高のものが醍醐だから、今のチーズのようなものなのだろうね。その醍醐の味が醍醐味。」

「じゃあ、醍醐寺って、チーズのお寺？」

「いやいや、醍醐寺は京都の伏見区にあるお寺だよ。さっき言ったように、五味というのは乳味・酸味・生酥^ソ味・熟酥味・醍醐味なのだけれど、この五つを仏様の教えを身につける深さにたとえたのだね。仏教の教えの最も深いところが醍醐味の段階。醍醐寺は仏様の教えの最高のところを身につけるお寺なのだね。」

「最高のおいしさやおもしろさなんかも醍醐味と言うのよ。」と、おばあさん。

醍醐寺って、チーズのお寺？



醍醐寺は京都の伏見区にあるお寺だよ。醍醐寺は仏様の教えの最高のところを身につけるお寺なのだね。



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (243)

ご持参して

公民館でのサークルの会合のあと、タモツ君のお母さんがタモツ君のおばあさんのところに寄りました。

「早速ですけど、お義母さまにおたずねしたいことができて、お寄りしましたの。」

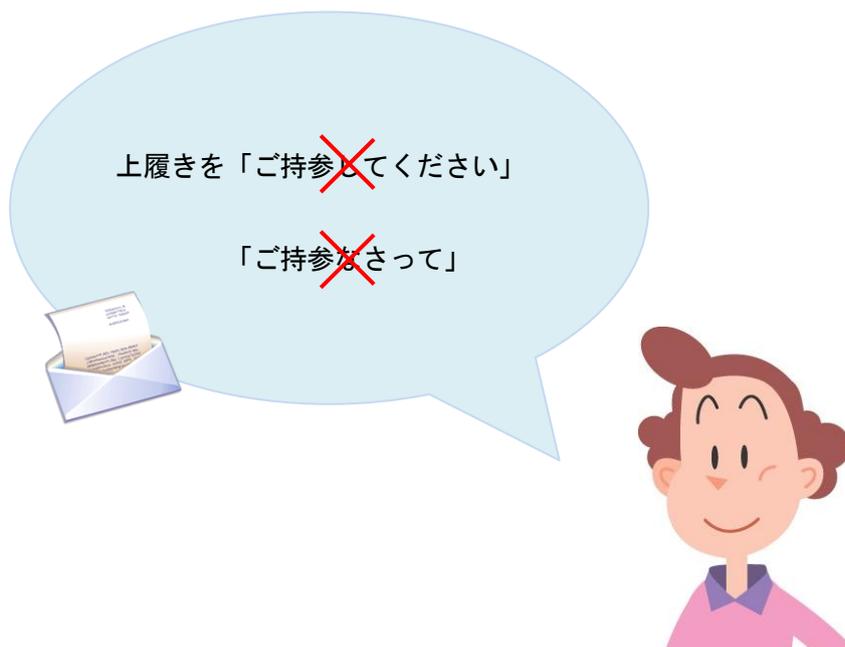
「あら、なにかしら。」

「公民館の私たちのサークルで大学の先生のお話をうかがうことになって、サークルの宣伝を兼ねた案内状を出すことにしたのですけれど、案内状のことば遣いのことで、ちょっと、もめたんです。「上履きをご持参してください」っていうところなんです。」

「あら、「ご持参して」は、まずいわね。謙譲表現になりますもの。」

「ですよね。で、「ご持参なさって」にしては、ということになったのですけれど……」

「それでもいけませんね。「持参する」というのが、謙譲語ですもの。」



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (244)

持参する

タモツ君のお母さんがタモツ君のおばあさんのところでおばあさんと話しています。

「え？ 「持参する」って、謙譲語なのですか。」

「微妙なところですけど、「持って行く」ことをへりくだって「持ってまいる、持参する」と言ったのでしょから、まだ、謙譲語と見てよいのではないかしら。」

「そうなんですか。それじゃあ、「ご持参して」も「ご持参なさって」も困りますね。」

「ええ。でも、今では、「まいる」が「行く」とか「来る」とかの丁寧語としても使われるようになっているから、「持参する」も「持って行く」の丁寧語だと思われるようになっているのかもしれませんが。」

「困ったわ。お義母さまなら、どうなさいます？」

「簡単。「お持ちになってください」か「お持ちください」にします。」



「お持ちになってください」

「お持ちください」

【編集部注】おばあさんは、「持参する」という漢語サ変動詞を避けて和語の「持つ」にし、「お持ちになってください」か「お持ちください」にするというのです。ただし、「お持ちしてください」はいけません。「お～になる」は尊敬表現ですが、「お～する」は謙譲表現だからです。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (245)

まいる・うかがう・参上する

タモツ君のお母さんがタモツ君のおばあさんのところでおばあさんと話しています。

「小学生のころかしら、「見る」については、「ご覧になる」が尊敬語で、「拝見する」が謙譲語、「言う」については、「おっしゃる」が尊敬語で、「申し上げる」が謙譲語だと教わったことがありますけれど、「持参する」が謙譲語だとは教わらなかったと思います。」

「でも、「いらっしゃる」が尊敬語で、「まいる」や「うかがう」や「参上する」が謙譲語だとは教わらなかったかしら。」

「中学生のころ、「参拝する」とか「参詣する」とかが謙譲語だって教わったかな。」

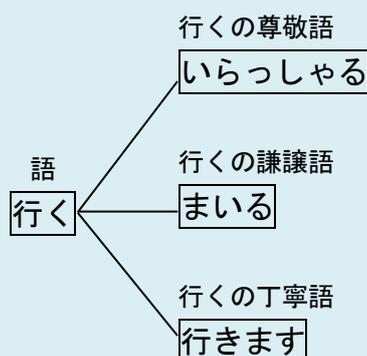
「勤めに遅れると、「遅参いたしました」なんて言ったものですがけれど、「遅参する」なんて、このごろは、言わなくなったのかしら。」

「あまり聞きませんね。私は使ったことはありませんわ。」

・おばあさんが、いらっしゃる。



・私がまいます。
・私が行きます。



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (246)

ご静聴

タモツ君のお母さんがタモツ君のおばあさんのところでおばあさんと話しています。

「もう一つ。公民館の会報に半年前の講演の記録が載ったのですが、講演の最後のことが「ご静聴に感謝いたします」になっていますの。」

「よくある誤植ね。」

「講演をなさった先生が原稿をご覧になったっていうのですがけれど……。」

「お見逃しになったのね。」

「時間をかけて録音を文字に起こした方が気になさっていて……。」

「そう。清覧とか清鑑とか清栄とか清祥とか、ほかの人の見ること、鑑賞すること、健康でしあわせであることをいう尊敬語がわからなくなっているから、しかたがないわね。」

「ああ、その「清」なんですね。手紙で見たことがあります。」

ご静聴……しずかにきくこと。

ご清聴……他人が自分の話などを聴いてくれることを敬っていう語。

『広辞苑 第六版』

「ご静聴に感謝いたします」は、よくある誤植ね。



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (247)

清〇・高〇

タモツ君のお母さんがタモツ君のおばあさんのところでおばあさんと話しています。

「そうよね。清栄とか清適とか清覧とかってというのは、手紙でしか見ないわね。話し言葉に使うのは清聴くらいかな。だから、静聴にまちがわれるのかしら。」

「以前、「ご高見をお聞かせ願いたい」と言っているのをテレビで見たことがあります。」

「ああ、そうね。高説とか高評とか高覧とかは、話し言葉でも使うかな。」

「高評って、高い評判じゃないのですか。」

「そう、評判の高いことの意味にも使うけれど、ご高評を仰ぐとかご高評を賜るとか、すぐれた批評ということで、ほかの人の評価の意味でも使うのよ。」

「ご清聴の「清」に比べると、ご高説の「高」のほうが敬語って感じがしますね。」

「清いっていうより高いというほうがほめ言葉だという感じが出るせいかしら。」

高評って、高い評価
じゃないのですか。



ご高評を仰ぐとかご高評を
賜るとか、すぐれた評価とい
うことで、ほかの人の評価の
意味でも使うのよ。



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (248)

貴〇・玉〇

タモツ君のお母さんがタモツ君のおばあさんのところでおばあさんと話しています。

「清聴の「清」とか高説の「高」とか、尊敬語にするのって、ほかにもありますか？」

「よく使うのは、貴社・貴校の「貴」。玉案・玉稿の「玉」なんかもそうね。そうそう、和語だけれど、御地・御中・御礼・御身・御許の「御」もそうかな。」

「御身なんて、おもしろいですね。」

「そう。「おからだ」とか「ご^{シントイ}身体」とかとは感じがちがうのでしょうか。手紙には「御身お大切に」とか「御身おいとください」とかって、書きますね。」

「あ、その「おいとください」。「いとう」って、嫌うということですよ。」

「そう。「厭う」と書くのですけれど、「御身おいとください」の場合は、「いたわる」の意味なのよね。おからだに害をなすものを嫌がりなさってくださいということかしら。」



【編集部注】『広辞苑 第六版』の「いと・ういフ【厭う】」の語釈を摘記すると、く①好まないで避ける。いやがる。②この世を避け離れる。出家する。③害ありとして避ける。④いたわる。かばう。大事にする。「時節柄おからだをおーい下さい」です。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (249)

お申し込みください

子どもたちが寝静まったあと、タモツ君のお母さんがお父さんと話しています。

「今日、お義母さまに教わったのだけど、保夫さんは「持参する」という動詞が謙譲語だって知ってた？」

「謙譲語？「お送りした資料をご持参ください」なんて文面の書類をよく見るよ。」

「そうよね。「このはがきでお申し込みください」の「申し込む」と同じで、「参」とか「申す」とかがあっても、謙譲語じゃないみたいでしょ。」

「そうだね。でも、その「お申し込みください」だけど、入社したてのころ、上司に注意されたな。「お申し込み」を「ご注文」とか「ご予約」とかにしろって。」

「そうなんだ。「持参する」は気にならないけど、「申し込む」は気になるんだ。」

「うん。「お申し込みください」は、今も、使わない。」

× 「お申し込みください」

↓

○ 「ご注文」「ご予約」



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (250)

小社・弊社

子どもたちが寝静まったあと、タモツ君のお母さんがお父さんと話しています。

「しごとの上で、敬語なんか気がなることって、もっと、ある？」

「意外にあるよ。自分の会社についていうときには、小社とか弊社とかにする。お相手の会社は、貴社・御社。」

「ショウシャって、小さなのショウ？」

「そう。自分のことをへりくだって小生というのと同じ。」

「拙者とか拙宅とかの「拙」は使わないで、「小」になるんだ。」

「うん。「拙」は「拙案」って使うかな。自分の意見は「愚見」、自分の考えは「愚考」。」

「私は「愚妻」でしょ。」

「僕はそう言わない。年輩の方が「小妻」とか「けいさい荆妻」とかって言うのを聞いたかな。」

自分の会社…小社、弊社
相手の会社…貴社、御社

自分の意見…愚見
自分の考え…愚考

自分の妻…愚妻、小妻、けいさい荆妻

